

社会的養護の一端を担う里親の意義と課題

遠藤行博（施設で生活する子どもたち支援研究会・共同研究者）

今から32年前の夏、末娘が小学校に入学し時間的に余裕ができたので里親登録し、当時2歳のAを預かって養育を始めた。その後5歳児、小3児の養育里親を務めた。その間に多くの里親さんに出会い、しんどい時や対応に迷う時は励まし合い、喜びを分かち合ってもきた。

養子縁組前提の里親さんとも出会う中で、「この子によって親にしてもらった」と言われる方が何人もおられた。里子を育てることで公園デビューも経験し、幼稚園や学校に行き、参観日やPTAなど数々の行事にも参加できた。こども会を通して地域の親世代ともつながった。そんな経験ができたのも里子のおかげだと受け止められている。私は3人の実子を育てる過程で、「わが子によって親にしてもらった」という感覚はなかった。「この子のおかげで親にしてもらった」と思ってくれる人に育てられる子どもは幸せだ。

私たちが最初に預かったAは、いわゆる「元気もん」で、友だちや教職員との間で度々問題を起こした。子どもの世界で起きていることを、親はほとんど知らないものだ。ケンカをした子どもの親から「とっとと親元に帰れ」と言われたとか、言い争いになった際に相手から「黙れ、捨て子」と言われたとか、自分の責任でないことを言われた時に、Aがやるせない腹立たしい気持ちになるのは当然だろう。乱暴なふるまいや、教職員への反発・抵抗は好ましいことではないが、なぜそういう行動になったか訳を訊いてほしい。世間によく言われる「困った子は、困っている子」とは的を射ている。里親や教職員が子どもとの関係でしんどいと感じる時、子どもはそれ以上に苦しんでいるというのも、その通りだと思う。

Aは嵐のような思春期を過ごし、これ以上落ちるところがないような生活を経験した。その間に私たち夫婦と何度も衝突した。「どうして社会に盾突くしんどい生き方をするのか」と尋ねた時に、Aは「オレは生まれてから一度も大事にされたことがない」と言った。「里親としての

責任もあるし、大事にしてきたと思うけど…」と言葉を返したら、「責任で子どもを育てるんじゃない」と言う。「そしたら何や？」と尋ねる私に彼は言った。「愛や、絶対的な愛や。何があっても見捨てないという愛や」と。決して口先だけでないAの重い言葉に、私は「そうか」と返すだけだった。

二十歳を過ぎたころに、Aが家に来て「もう一度、ここでやり直したい」と言ったが、私たちは「自分の力で頑張る。何かあったら協力する」と、心を鬼にして断った。そこから彼は定職に就き、責任ある立場も務め、今日に至っている。8年前の正月明けにAから電話があった。「宿を予約したから温泉に行こう」と。相手の都合も聞かずに事をすすめるのは相変わらずだったが、喜んで話に乗った。1泊2日の帰り道、Aが言った。「今までいろいろありがとう。やっと言えたわ。オトンのラーメンとオカンのチャーハンは旨かった」と。里親なんてしんどいこと、他の人には薦められないと思ってきたが、その瞬間、心の重荷がすっと下りたようで、里子との出会いが自分の人生をゆたかにしてくれたと思えた。

里親だけで里子を養育するのは苛酷だ。私たちも判断に迷った時、何度も民間機関のケースワーカーに相談した。弁護士や保護司にも世話になった。近年、被虐待や発達障害など、養育上難しいケースが増えている。それだけに、今まで以上に支援体制が必要になる。2012年から里親支援専門相談員が養護施設・乳児院に配置され、里親開拓やアフターケアを担っているが、里親委託の実績がまったくない施設にも相談員が配置されていたり、短期間で交代したりするのも、里親として相談がしにくくなる一因だ。そんな意見をぶつけると、「相談員だけが担うのではなく、施設全体で対応する」と言われるのだが、私の心はモヤモヤしたままだ。里親会がもっと活動力をつけ、支え合う体制を確立することも必要だと考える。今年度から里親支援センターが開設され、支援体制も充実されてくるのだろうが、基本は「子どものための里親制度」であることを忘れてはならない。また、家庭が崩壊する前に支える「ショートステイ里親」も重要度を増すだろう。あわせて、自治体による里親のPRも必要になる。

最後に60年以上にわたって里親開拓と支援をしている（公社）家庭養護促進協会のキャッチフレーズを紹介したい。「今日、社会が子どもを守り 明日、子どもが社会をつくる」。子どもを大切にしない国に未来はない。